

テーマ「国語の参考書の活用」

■どうする…

「国語の参考書って何を使えば…」

よくある質問です。学習に参考書は必要です。書店に駆け込み、いろいろな参考書を物色してはみるものの、どれがいいのかわからない。ネット評価が高いものを選んでみても、どうも自分にはしっくりこない…。

私が昔から伝えていることですが、参考書、問題集選びは「洋服選び」みたいなものです。あの人には似あうけど、自分にはちょっと…、そんなことが起こるのが参考書、問題集選び。中でも、国語の参考書はどう使えばよいのかさっぱりわからない…。今回はそんな話を考えてみます。

■② 知識を伝える参考書

**調べる道具にするもよし、  
読むもよし。**

いぜんもどこかでお伝えしたことがありますが、国語辞典を読む、国語便覧を読むというのもありな使い方です。基本的な使い方は、調べ事での利用になりますが、国語辞典にしても、国語便覧にしても、興味を引き寄せる内容がぎゅぎゅ詰まっています。

ふと思いつきさせるのは、幼児が乗り物図鑑や動物・昆虫図鑑をひたすら読む姿です。ちょっとしたきっかけなのでしょうが、「おっ」と思うものがあれば、きっと読んで面白いのが国語辞典や国語便覧です。読むもよしですよね。

■国語の参考書の種類

- ① ルールを教える参考書
- ② 知識を伝える参考書
- ③ 知識を詰め込む参考書

①と②に明確な線引きをするならば、①はいわゆる「ハウツー参考書」、②は便覧や辞書などの参考書とでもしておきましょう。そして、③は赤シートを使うような暗記を補助する参考書です。今回はこれらの参考書に限定した話になります。それぞれの参考書の編集も意図や目的を考えながら、その活用をさぐってみましょう。

■③ 知識を詰め込む参考書

**読むだけでははく、手も動か  
す！**

赤シートを重ねて、御経を唱えるようにぶつぶつ口を動かす…。よく見られる光景です。もちろん、そういう作業も必要なことは事実です。私にも経験があります。それだけで覚えられるのであれば、効率的でよいでしょう。ただ、一方で、それでは覚えられない場合もあります。

そんな場合は、手を動かす、五感を十分に活用することも必要です。地道ながらも案外そこが大切だったりします。

■① ルールを教える参考書

**まずはざっと読む？**

「●●読解法」「偏差値が●アップする●●」といったハウツー参考書についてですが、これは「読んでわかってもらって、実行してもらおう」ことを目的としているので、まずは「読む」しかないでしょう。ただぼーっと読むもよし、「これなら自分もできる」というところを抜き出して、実際に取り組んでもらうもよし。いずれにしても「読んだだけでは」どうしようもないので、必ず実際の問題とセットで取り組むことが必要です。タイトルの「これ一冊で」は少々無理があるような気がするのですが…。

■まとめ

**参考書って結局●●を提供してくれているんです**

1. まず読む！
2. 手を動かす！
3. 五感を使う！

この話のまとめとしてふさわしいかわかりませんが、こうしてみると参考書というのは、私たちに勉強をするきっかけを与えてくれる素材にすぎないのです。「それだけで」ではなく、「そこから」の書籍が参考書の役割なのです。そこをふまえて参考書と向き合ってみてはどうでしょうか。